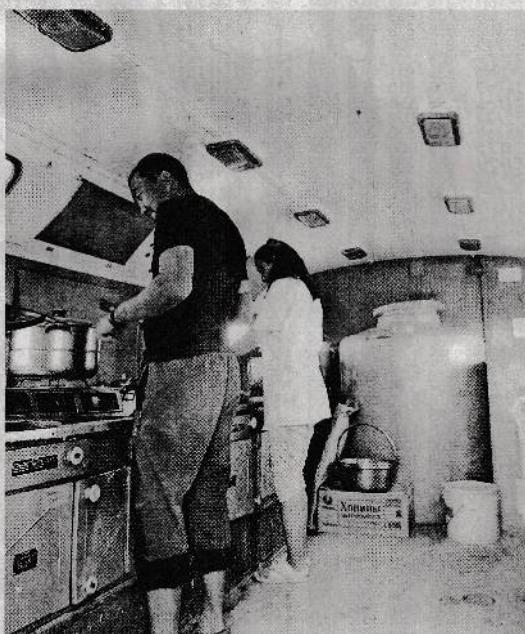


くらし

20年余り前も現在も、ゴビ砂漠恐竜調査生活で変わらないのは「水の貴重さ」である。

今年の調査では約1トントの水をウランバートルから運び、普段の調理用の水はそれを使い続けた。隊員が持ち歩く飲料水は市販のミネラルウォーターを持って行った。食器洗いや洗濯に使う水は15キロほど離れた井戸まで時々水をくみに行き、200㍑ずつ持ち帰って使った。水くみ作業はできるだけ回数を減らしたい嫌な仕事だ。だからみんな節水が板についている。手洗い・洗顔・歯磨きは合わせてコップ1杯で済ませる。洗髪等もほとんどしない。調査期間中のシャワーはない。時々濡れタオルで体を拭ぐぐらいである。それでも平気なのは空気が乾燥しているからだろう。

⑥ 節水、節水、節水



調査隊の大型トラックは、荷物を下ろすと荷台が台所になる。奥の大きなタンクは900㍑入りの飲料水タンク。これで料理の水をまかなう

モンゴル再び

石垣 忍

は、すすぎの前には徹底的に絞ること、すぎのあと石鹼分が残っていても気にしないことである。こうして隊員は「気にしない」ことを身に付けて10ヶ月洗濯ができるようになる。

気にして言えど、ゴビの生活をするいろいろなことが気にならなくなっている。と言うか気にしていたら神経が持たないので気になくなる。たとえば「小」や「大」のトイレを適当に隠れてすること、衣類やテントが砂だらけになると、小虫や砂が料理に入ること、タオルと雑巾の曖昧化などもだんだん気にしなくなる。

現在のような超清潔環境で人間が暮らし始めてからまだ数十年しかたっていない。私たちが本来持っている野性の感覚が、そんな短期間で衰えることはないだろう。ゴビの生活はそういう野性の感覚を呼び覚ましてくれること、思う。

ただ、調査が終り、文明社会に戻ったら、この神経はリセットが必要に思う。ただし、この神経はリセットが必要に思う。

洗髪、シャワーなし

なる。そのリセットが不十分な私は、よく家人とトラブルになる。

「たいしたことはないじゃないか。ゴビ砂漠ではなあ……」「ここは日本です」と。

これは私が悪い。公の場で野性の感覚に基づく無神経さが出来ないことをひたすら願っている。

(岡山理科大教授)

すぐ方法を習った。伝授されたコツ

ある。私は20年前にモンゴル人から10ヶ月で下着一式と調査ズボンを洗濯してすぐ方

『隨時掲載』